

国語(現代文)

▲文(日本文・中国文・外国語文化・哲)・神道文化・法・経済・人間開発・観光まちづくり学部▼

【現代文】

1

出典

山折哲雄『さまよえる日本宗教』(第三章 歴史と民俗 折口信夫——天然の無頼派)(中公文庫)

解答

問一

(1)ーエ (2)ーイ (3)ーイ

問二

イ・エ・キ

問三 ア

問四 ウ

問五 オ

問六 オ

問七 ウ

問八 ア・エ

問三 イは「生まれつきの気まぐれ」が誤り。文中にない。ウは「氣質を真似した」が誤り。「無頼派を演じようとした」

(第五段落)と文中にあるのは、「真似」を意味しない。それどころか、「無頼派」と称される代表的な作家のほうが折口と比べて「浅く、狭い」(第四段落)とまで筆者は述べている。エは「本人は無自覚」が誤り。「天然の無頼派」は「生得的なもの」(第五段落)であったことを意味しており、「無自覚」だったわけではない。オは「自分自身の無頼への欲望」や「生まれ育ちにより得られた歴史的な深み」が誤り。

問四 「人知れず宣言」とは、折口自身が論文や講演で「無頼派」を称した記録はないが、内容から「無頼派」と判断できる材料がある、ということである。イ・エはこの「人知れず宣言」の説明から外れており、誤り。なお、エはさらに「刺激的な欲望と向き合っていた」という説明も適当とは言えない。折口学のなかで「欲望」に関わる論題が「刺激的な地位」であるとは述べている(第十段落)が、「欲望」そのものが「刺激的」であるとは述べられていない。アは「自身の心の鬱を吹き払うことを学問の目的としていた」が誤り。オは「あらためていうまでもないことであるから」が誤り。

問五 折口の『生活の古典としての民俗』からの引用に、「両端が相まつて初めて、人間の生活、社会の機構が決る」とある。秩序を維持するための「道徳」(＝傍線部の「それ」が指すもの)と、秩序の底にあつて「宗教」や「道徳」が秩序をつくるもととなる「悪徳」、両方揃っていないければ民俗学は研究できない。アは悪徳を「共同体の人事や行事の一環」として扱っている点が誤り。イは「民俗が維持する秩序」、ウは「社会秩序を支える制度として儀式化」がそれぞれ誤り。「アナーキーな攪乱要因」を「儀式化」するのではなく、「抑制しコントロールする」ために、「共同体の人事や行事を儀式化」する(第十二段落)というのが正しい。エは「そのような感覚から民俗宗教的なタブーやもの忌みが……成立する」が誤り。「悪徳」の感覚から規範が成立するのではない。

問六 「民俗」は「たんなる生きるための生活の古典」(傍線部(d)の前の段落)であるのに対し、「宗教や道徳」は「社会

加藤秀俊『メディアの発生 聖と俗をむすぶもの』(第二章 宮中のだ自慢——『梁塵秘抄』の知識社会学) (中央公論新社)

- 問一 (1)ーウ (2)ーオ (3)ーオ (4)ーア (5)ーエ (6)ーイ
- 問二 オ

の秩序や規範をつくる」(傍線部(d)の段落)ことに注目する。アは「道德や宗教に従属しなければならなかった」が誤り。「生活の秩序」としての実践は存在する。イは「普通の人々は社会的には力をもたない」が誤り。「民俗」が「無力」であることは、人々が無力であることを意味しない。ウは「本来的に道德や宗教とは相反する」が誤り。エは「現代の社会に対応して……可能性に乏しい」が誤り。

問七

折口の言う「ごろつきの道德」は、社会的には「反道德」とされ、「今日の目からは量ることのできない」ものだが、特有の「雅量」をそなえている。エの「ごろつきが悪徳や悪業とともに美しい芸能もほとんど同時に生み出した」ことや、オの「悪業が秩序に属する人間たちの道德の規範を逆説的に生み出した」ことを「ごろつきの道德」と言っているのではない。また、傍線部(e)の三段落前より「正統的な武士道」とは別のタイプの「武士道」につながっていくので、アは誤り。イは「反社会的な人間であるため道德心をもち合わせない」が誤り。「正統的な道德」とは別の「ごろつきの道德」は持ち合わせている。

問八

イは「一時的な衝動により」が誤り。やがて変化し衰退するとは述べられているが、一時的な衝動が原因とは述べられていない。ウは「同時代の読書経験から」が誤り。折口がフロイトやデュルケムを読んだかどうかは不明。オは「土地を得た山伏」が誤り。「無法性」と結びつく悪党につながるのはむしろ「浮浪性」(第二十四段落)。カは「ごろつきの道德」について「今日の俠客の雅量と同様」としている点が不適切である上に、「主家が滅ぶとき」が誤り。敵の三浦家が滅ぶときの話である。

問三 ウ
問四 エ
問五 ウ
問六 エ
問七 ア
問八 イ
問九 イ・ク

解説

問二 傍線部の直前に「消えゆく無形文化財を記録する」とある。形のない文化であるため、せめて記録に残さなければなくなってしまうものを重視したのである。イ・エは後白河が失われるものを残そうとした意図を説明できていないため不適。アは「文化的価値など全く無いと見なされていた今様」が誤り。ウは「青墓の歴史の生き証人である乙前」が誤り。乙前が伝承しているのは今様であって歴史全般ではない。

問三 直後の文に、「美濃国分寺の遺跡がのこっているからである」と理由が述べられている。また、この国分寺の意義として、「いまでこそそのどかな農村だが……ひとときわ目だつランドマークだった」「この地域で古代からつづく重要な象徴的空間だった」とある。イ・エは国分寺について言及していないため不適。アは国分寺が建っていたことの意義が誤っている上に、筆者が疑問に思った「この変哲もない平和な田園の……」の意図から外れている。

問四 傍線部の直後に「寺社があれば……芸能の徒が集結する」とある。「寺社」と「芸能者」について言及しているエが適切。

問五 後白河が追討の命を下したのは義朝に対してであり、ア・イ・オは誤り。また、『梁塵秘抄』に登場するのは延寿であるため、ア・エは誤り。

問六 傍線部の前に「我が子朝長を手にかけてその義朝」、同じく後に「首をすぼめるほど風は冷たかった」とある。

ア・イは単に「おだやかな田園の風」「ぼんやりとした雰囲気」が、不適。さらに、義朝は「涙ながらに我が子の首を打った」とも傍線部(e)の前段落にあり、これを筆者は「悲劇的経験」(傍線部の段落)とも表現しているが、ア・ウ・エはこの義朝の心情をくみ取っておらず、誤り。

問七 「異名」とは実名とは別に付けられた名のことであるから、「東海道」というもとの名称がなくなったわけではないので、ウは誤り。また、古来の「東海道」が「京鎌倉往還」とも呼ばれ、その一部が「鎌倉街道」と異名をとるのであり、もともと「京鎌倉往還」と呼ばれていたわけではないから、イ・エはもちろん、古くからあった「鎌倉街道」が「東海道」と連結したとする才も誤り。

問八 「異文化間コミュニケーション」とは、「伝統的な『みやこ』と新興勢力としての『あづま』」の文化が接触して混合することであると、傍線部に述べられている。また、三つ前の段落にも「青墓は旧体制を代表する京都と新興勢力としての鎌倉というふたつの権力が交錯する結節点」「このあたりで混合しはじめていたようでもある」とある。これらに合致するイが正解。エもほとんど同内容だが、「京都と東国のどちらに行くことも可能であった」のは青墓に限らず、もつと東国に近い方でも京都に近い方でも街道上はどこでもあてはまることであり、「権力が交錯する結節点」の説明になっていないので不適切である。混合ではなく「対立」としているアや、「最新の情報」のみに言及しているウ、「東国の異文化が理解されやすい」と一方的になっている才もそれぞれ不適。

問九 アは「後白河は乙前に秘曲を伝授」が誤り。主客が逆である。ウは「風雅の旅」が誤り。傍線部(g)の次段落で「べつだん風雅をもとめてのことではなく」と述べられている。エは「鎌倉から」が誤り。「奈良から」が正しい。オは「天武天皇の子」が誤り。正しくは「天智天皇」。カは「尾張国」が誤り。「飛驒国」が正しい。キは「尾張城主の織田信長」が誤り。「家康」が正しい。

青田麻未『「ふつうの暮らし」を美学する 家から考える「日常美学」入門』〈第4章 親しみと新奇さ
地元を事例として 2 ハアパラによる親しみと新奇さの区別〉（光文社新書）

解答

問一 Iーキ IIーオ IIIーイ

問二 (1)ーア (2)ーエ (3)ーイ

問三 オ

問四 イ

問五 エ

問六 ウ

問七 イ

問八 イ・オ

解説

問一 I、「そもそも」は物事の根底や前提に立ち返るときに用いる。空欄後の「基本的な概念」がヒント。

II、パリを「たんなる空間であるだけではなく……独特の意味を帯びた対象」の具体例として挙げている。

III、「むしろ」は二つのものを比べて前者よりも後者を選ぶときに用いる。空欄の前の文で「見た目のみによるものではない」と前者を否定し、空欄後に「これらの景観が……できるからこそ」と後者を肯定しているのがヒント。

問三 「場所」には、「空間と私たちとの関係性」が欠かせないとされ、その内容は傍線部の前で「その空間で人々……が過ごしてきた来歴」、さらにその前の段落で「そこに暮らす人々が紡ぎ上げてきた歴史や文化」と説明されている。イ・ウは「私たち」または「人々」に当たる存在について言及しておらず、不適。エは「人」について言及しているものの、「そこに暮らす人々」ではないため、やはり不適。アは「景観の美」に限定してしまっている点が誤り。

問四 傍線部の前にある「それを見ている私がどんな人物なのか」「『私』の属性によって、その場所が持つ意味もまた変

わる」とある。そしてこの「属性」とは、旅行者なのか短期間の住人なのか、生まれながらの住人なのかという意味である。ウ・オは「属性」の意味が誤っている。ア・エは「場所が持つ意味」ではなく場所そのものや「場所の価値」が変わってしまったためどちらも誤り。

問五

傍線部の後に「地元にいるときよりもずっと活動的になり、周囲の環境を知覚する」「馴染みない場所は……より敏感になるように要求する」とある。アは「馴染みない場所」ではなく「美しい場所」になっており、オは場所が「海外」に限定されているためどちらも誤り。イは「活動的」「敏感」ではなく「快く感じる」と説明されている点が誤り。ウは「少しの違いでも見つけ出す」となっているが、「違い」だけに着目しているわけではないので誤り。

問六

傍線部の次の段落に「ここでいう解釈は……〈ある場所と自分との関係を、ていねいに築いていくこと〉」「自分なりの意味をその環境のうちに見出していくこと」とある。そして、「親しみ」は「歩いていてもなにも気にならないような……『私の場所』になっていく」（傍線部の二段落後）ことである。

問七

傍線部で「背景」と言っているのは、その前で述べている「そこにあるものに注意を払うことがなくなっていくます」と、後に述べる「どうでもいい場所になったのではなく、むしろ自分の日常の欠かせない構成要素になっている」の二点を踏まえた表現である。エ・オは「文化や歴史から遠ざかり」「解釈は役割を終え」と前の部分で述べている内容にそぐわないため誤り。ア・ウは「歴史が失われてしまうわけではない」「目新しいものに出会うことが難しくなる」が、後の部分で述べている内容に合わないため、これも誤り。

問八

アは前半「人はその本質として新奇なものを好」むが、本文に書かれていない。ウは「自身を構成している文化や歴史を見出すこと」が誤り。正しくは、「自分なりの意味を」見出すである（傍線部(d)の次段落）。エは「『私の場所』となったから」が誤り。「私の場所」は親しみへと移行した状態であり、新鮮に感じられるのは新しい場所である。カは、「私の歴史の背景」が誤り。正しくは「生活の背景」（最終段落）である。